

長野県立歴史館たより

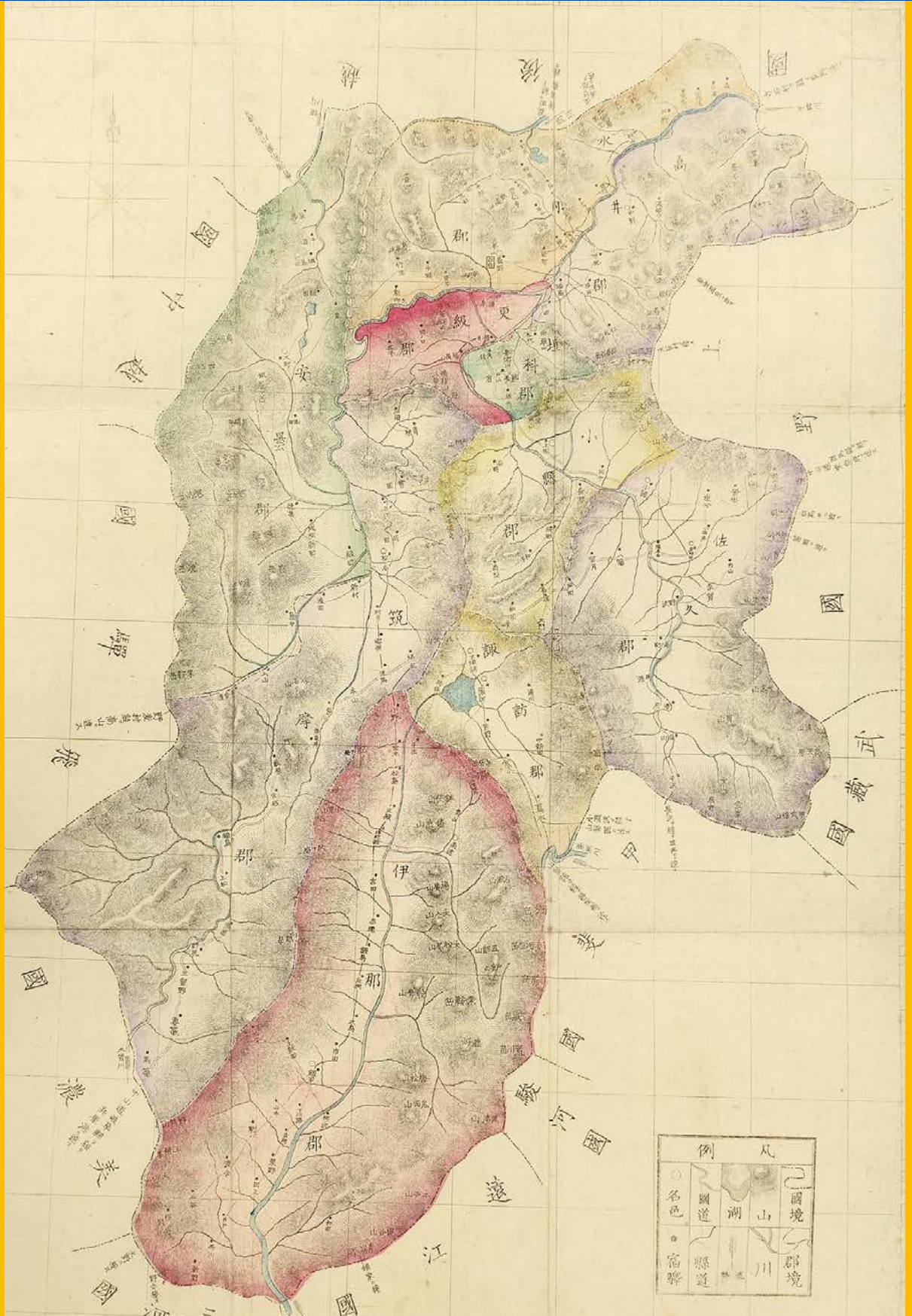
2017年 **夏**号 vol.91

特集

夏季企画展

長野県誕生！

— 公文書・古文書から読みとく —





常設展示室から ～新展示のみどころ紹介～



原始「華やかな土器文化と生業」

縄文時代中期(約5,000年前)の展示を一新し、当館所蔵の華やかな土器、富士見町札沢遺跡の動物装飾付土器、小諸市郷土遺跡の蛇体装飾付土器、塩尻市上木戸遺跡の台付土器がそろいます。前期の長野市松原遺跡のトロフィー形土器(写真右端)とともにご覧ください。

土器の文化が高揚した背景には、生業にクリ林



の管理やダイズ栽培などが加わり、生活が安定した点がありました。一方、良質な黒曜石(岡谷市大洞遺跡)やヒスイ(上木戸遺跡)などを入手するため交易が盛んに行われました。交易に際しては土器も運ばれ、塩尻市剣ノ宮遺跡や筑北村東畑遺跡(写真中～左)では、さまざまな地域の土器が出土しています。

各地の“地域の顔”を見比べてみてください。

古代～中世:「都と信濃(東山道をむすぶ)」

日本で最初の鑄造貨幣は、「和同開珎」とされていましたが、1999(平成11)年、奈良県明日香村飛鳥池遺跡の発掘調査から「富本銭」であることが明らかになりました。その直後、下伊那郡高森町武陵地1号古墳や飯田市座光寺地域から出土していた不明銭が「富本銭」であると判明し、大きな注目を浴びました。「富本銭」は、「食と銭は国を富ませる本、民を富ませる本」との意で、藤原京造営のために鑄造されたと考えられています。奈良県藤原京跡を中心に、全国で10例ほどの遺跡でしか発見されていません。また下伊那地域の飯田市恒川遺跡群からは、出土例の少ない「和同開珎銀銭」が出土しています。この地域は東国の律令体制整備に関わる重要な位置にあたり、都と信濃を往来した役人や役夫、運脚夫により、流通銭または厭勝銭(呪い銭)として持ち込まれたと考えられています。

長野県内では、約60の遺跡から100枚以上の古代銭貨が確認されています。「和同開珎」から「乾元大寶」までの約250年間には、皇朝十二銭といわれる銅銭が12種類つくられ、このうちの11種類が県内で確認されています。その分布を見ると、「和同開珎」は千曲川流域に集中し、松本市域には「萬年通寶」以降のものが集中していることがわかります。

この春より、皇朝十二銭(実物)や「富本銭」「和同開珎銀銭」(ともに複製)を展示しています。



常設展・古代コーナー

近世「街道の風景」

江戸時代後期、街道は寺社参詣・物見遊山を目的とした旅行者でにぎわうようになりました。信濃への旅の代表格は善光寺参りで、そこへの街道は「善光寺道」あるいは「善光寺街道」と呼ばれ、道標が建てられるほどでした。

絵師が描いた道中画を見ると、三度笠をかぶり、着物をたくし上げ、手甲・脚絆に草鞋をはいた旅人が描かれています。道中合羽やももひき姿、行李をかつぐ姿もあります。

新展示では、道中画として歌川広重や溪斎英泉が描いた『木曾海道六十九次之内』、旅装束の道中合羽・笠・草鞋、旅の携行品として行李・矢立・煙管・財布・印籠・胴乱・小田原提灯などをご覧ください。現代風にいえば、行李は旅行カバン、矢立は筆ペン、小田原提灯は懐中電灯、胴乱

は火打道具や薬、銭などを入れた革製の小袋です。

旅のガイドブックは片手で持てるハンドブックです。『諸国定宿帳』には安心して泊まれる旅籠屋や茶屋が記され、『岐蘇路安見』には中山道筋の様子が絵やコメントで紹介されています。旅人はこれらを頼りに、旅への憧れやプランを胸に歩いたことでしょう。



旅の携行品（当館蔵）

近現代「戦前の観光信州」

最近ではあまり見かけなくなりましたが、かつて我が国では特定の観光地や鉄道沿線を描いた横長の「鳥瞰図」によるパンフレットが盛んに発行されていました。特に、大正末から昭和戦前にかけて隆盛を極め、吉田初三郎、金子常光など鳥瞰図の作画を専門とする画家が人気を博するほどでした。この時期は生活の近代化が進み、休日に旅行を楽しむ階層が現れたことや、国立公園法が施行(1931年)され、長野県では中部山岳国立公園が指定されるなど、自然保護の機運が生まれています。さらに全国各地で鉄道、とりわけ私鉄線が充実し、沿線の開発も進みました。こうした時代背景のもと、本県でも各地の寺社や温泉地、私鉄の沿線を案内する「観光パンフレット」が次々と発行されました。

新展示では、当館の誇る観光資料群の中から厳選した10点を紹介します。そのうち、金子常光による『観光を小諸一帯に求めて』は、1936(昭和11)年に発行された鳥瞰図です。画面の下辺に

沿って千曲川が流れ、その上には小諸城址と小諸駅を中心に、商業と製糸の町並みの様子が詳細に描かれています。この頃ようやく普及が進んだオフセット印刷による高精細な「刷り」も見どころです。

他にも、外国人観光客向けに英語表記を充実させた『志賀高原ホテル 海拔五千尺』(1939年)、温泉による健康づくりをアピールする『健康地スワ案内』(1929年)などを展示しています。



金子常光《観光を小諸一帯に求めて》
小諸商工会議所、1936(昭和11)年、オフセット印刷

平成29年度夏季企画展「長野県誕生！」



開催日：7月8日(土)～8月28日(月)

信濃国と長野県

長野県歌が「信濃の国」であることに象徴されるように、長野県では、しばしば「長野県」の代わりに旧国名に由来する「信濃」や「信州」を用います。なぜ、長野県民は「長野県」と呼ばず、「信州」「信濃」と呼ぶことが多いのでしょうか。

古代以来の「信濃国」から、長野県へ、行政単位が切り替えられたのは明治はじめのことでした。伊那県に始まり、最終的に1876(明治9)年、長野県が公式の呼び方になったのです。にもかかわらず、「信濃」や「信州」がいまだに私たちの頭から消えない。それどころか、むしろそちらのほうが親しみやすいといったほうがいいのです。

それはなぜでしょう。そして私たち長野県民はこれから先、自分たちの故郷「信州」をどのように呼び、見つめていったらよいのでしょうか。今回の展示は、それを考えるきっかけにできたら、と考えています。

江戸から明治へ

今から150年前、1867(慶応3)年10月14日、いわゆる大政奉還が行われ、これをきっかけに日本は近代国家へと歩み始めました。12月9日には「王政復古の大号令」を出して、新政府の発足を宣言しました。

新政府は、旧幕府勢力を平定する「戊辰戦争」[1868(慶応4)年1月3日～1869(明治2)年5月18日]を進めながら、新政府の基本方針「五箇条の御誓文」(慶応4年3月14日)・「五榜の掲示」(慶応4年3月15日)の発布、そして新政府の政治組織を定めた「政体書」の公布(閏4月21日)と、わずか数か月の間に矢継ぎ早に命令を出し、支配の基礎を固めていきました。

江戸を東京と改め(7月17日)、慶応から明治へと改元するとともに、天皇一代に一つの元号を用いることにするなど(9月8日)、天皇を中心とした支配体制の確立につとめました。

戊辰戦争の過程で、新政府の支配下に入った旧幕府領は、府・県として直轄支配に組み込まれました。また、旧大名領は藩として新政府の下に組み込まれる形をとりましたが、実態は江戸時代の大名支配そのものでした。そこで新政府は、明治2年、版籍奉還により藩を地方行政機構の一つに位置づけ、さらに明治4年、廃藩置県を行い、府県を中心とする地方行政制度の基本を確定したのです。

行政機関としての長野県の成立

慶応4年1月、新政府はこれまで天領と呼ばれてきた幕府領をすべて「天朝ノ御料」とし、「朝敵」各藩の所領とともに没収することを命じました。

信濃については2月、尾張藩に命じて信濃にある旧幕府領を接収して管轄させることとし、各藩預りの旧幕府領、御影陣屋、中之条陣屋、中野陣屋などの代官支配地や旗本知行地を接収しました。

閏4月には府・藩・県により地方支配をすることとなり、信濃では8月に伊那県を設置、伊那郡飯島(現飯島町)の旧陣屋に県庁を置き、尾張藩の任を解きました。



旧松代県より引継いだ帳簿(表紙)

一方、藩は諸大名に引き続き治めさせました。伊那県と江戸時代以来の14藩です。

明治2年6月、版籍奉還が行われ、藩も地方行政組織の一つとして位置づけられました。しかし、世直し一揆が各地で起こるなど、県と藩がそれぞれの政治を行う体制は長続きしませんでした。

明治3年9月、伊那県から中野県を分け、中・南信分を伊那県が、東・北信分を中野県が管轄し、支配の強化をはかり、さらに明治4年6月、中野県の県庁を長野村の善光寺町に移し、長野県と改称しました。そうしたなか、7月に廃藩置県の詔書^{しょうしよ}が出され、全国では3府302県、信濃には伊那県・長野県を含め、14県が成立しました。ひとまとまりの領域を持った県にはまだ程遠い状態でしたから、同年11月、第一次統廃合が行われ、全国では3府72県、信濃では長野県と筑摩県(旧飛騨国を含む)の2県に統合されたのです。

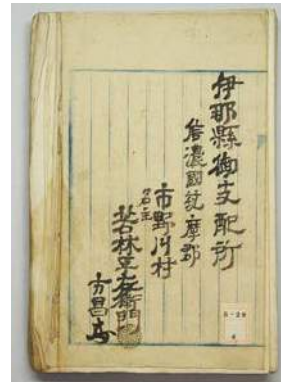
しかし、明治9年8月、内務省主導の大統廃合により筑摩県は飛騨分を岐阜県に渡し、長野県に併合され、新たな「長野県」が誕生しました。

庶民からみた「長野県誕生」

江戸時代の信濃は、松代藩・松本藩はじめ十余藩が分立し、そこに幕府領(代官支配地、預け地、旗本知行地)が細切れに組み込まれた複雑な所領構成になっていました。

人びとは、自分の居場所(住所)について、まず自分は何という領主の支配下にいるのか、次にそこは何という国の何という郡の何という町・村なのかという二重の表現を必要としていました。

明治になって江戸幕府の支配が崩れたのちに設置された当初の府県は、旧幕府領をおおよそ国単位にまとめたものでしたので、旧幕府領以外の旧大名所領は含まれていませんでした。「県」といってもあちこちに散在する旧幕府領の集まりで、一円的な領域を持ったものではなく、知事・判事などの職員を置いた、いわば役所に過ぎませんでした。



「御布告書留控」裏表紙



「御用状書留帳」裏表紙

しかも、伊那県から始まり最後に長野県にたどり着くまでに、さまざまな変遷がありました。この新たに置かれた「県」という組織が、いかにそれまでの国一郡一町・村という秩序を組み替えて、「県」に市民権を与えてゆくのか、それが大きな課題だったのです。

県支配下の特定の町・村を表すためには、「○○県管下○○国○○郡○○村」といった表記をして、一つの国の中のどこがその県の管轄なのかを示す必要があったのです。

「長野県○○郡○○町・村誰々」と表現することが一般化するのには、実に明治30年代以降でした。それは、多くの人々に「長野県」が受け入れられたことを示しています。今回の展示では、それをさまざまな資料から読み解いていきます。

長野県民とは何か

明治のはじめ、複雑な過程を経て「長野県」が成立しました。県庁は水内郡長野村に設置されました。村の名前が県の名前に採用されたことから、その名前が浸透するには長い時間と、自分たちの県だという意識が必要でした。

この場所が「長野県」という県民意識が定着したのが明治30年代のこと。しかし、その過程では、北部に位置する県庁の移転や、分県の議論も起きました。そうした中で、たびたび表面化したのは、もともとは「信濃国」であり「信州」なのだという意識だったのです。

本企画展を通して、私たちの「県民意識」を振り返る機会としていただければと思います。

研究の窓 応急処置された古代鉄刀の保存修復



はじめに

今回紹介するのは、佐久市白田の蛇塚古墳(7世紀後半期)から1984(昭和59)年の発掘調査(佐久市教育委員会が所蔵)で出土した二振りの鉄刀の保存修復です。いずれも長さが70cm弱あり、一つは柄の部分が楽器の鼓のよう^{つづみ}にくびれていることから立鼓柄刀^{りゅうこづかとう}と呼ばれ、もう一つは柄の部分が植物のわらびの先端のように巻き込みがあることから蕨手刀^{わらびてとう}と呼ばれています。

2013(平成25)年、当館の企画展展示資料として借用することになった際、市教育委員会が主体となって保存処理が検討され、当館が協力することとなりました。

保存処理

二振りとも無色透明の亚克力板と弾力のある樹脂保護材(90×22×10cm)に完全密封された応急処置がなされていました。一見すると封入時の形状は保全されているようでしたが、触れることができないため詳しい観察は困難でした。そこで2013年の調査時に行ったX線透過観察の画像を基に以下の工程を行いました。

(1) 立鼓柄刀

- ①樹脂保護材を補強しているアルミフレームを取り外す。
- ②保護材表層の5mm厚の亚克力板5枚(天板と側面4面)を剥がし取る。
- ③樹脂の流れ出しはなく、シリコーン樹脂(以下、樹脂)であることが確認できたので、割り取り、こそぎ取って、刀全体を取り出す。
- ④亀裂やサビ^{ぶく}脹れ内部の空洞にも樹脂はしっかりと充填・密着していて、溶剤にも溶けない。そのため、刀の形状を損ねている鱗片状^{りんぺん}のサビやサビこぶ、原位置ではない破片を除

去ないし分離し、刀本体および破片個々の表面に密着している樹脂をひたすらメスで割り落とす。

- ⑤柄部^{つか}に寄せ集められている破片群は、その隙間に樹脂が詰まっているので、一旦解体する。

(2) 蕨手刀

- ①～③は立鼓柄刀の場合と同様。
- ④樹脂から取り出した刀は、表面が大小のこぶや凹凸状のサビに覆われ、凹部に土砂や樹脂が密着しているので、エアーブラシも併用する。
- ⑤刃の長さの3/4の範囲で、刃先が鱗^かの口のよう^{かに}に二枚に開いているのを棟側で支えている状態。V字形断面の深い隙間に樹脂が詰まっており、可能な限りメスで切り出す。

(3) 薬剤処理と修復

封入樹脂からの取り出しや付着樹脂の除去に続き、以下の処理を行いました。

- ①有機溶剤洗浄：ブラッシングと振り洗い
- ②脱塩^{だつえん}処理：アルカリ水溶液に浸す
- ③脱アルカリ・脱水処理
脱塩処理薬剤および水分の除去
- ④恒温乾燥：105℃、3時間
- ⑤減圧樹脂含浸：亚克力樹脂25%乳化物
- ⑥風乾：乳化樹脂の完全固化
- ⑦付着シリコーン樹脂の除去：メス使用
- ⑧接着・サビ取り：エポキシ樹脂接着剤、酸化アルミニウム微粉末
- ⑨樹脂補填・補強^{ほてん}：亀裂、欠損脆弱部にエポキシ樹脂混合材
- ⑩整形・樹脂コート：精密加工用グラインダー、亚克力樹脂
- ⑪古色仕上げ：亚克力絵の具

確かめられたこと、判ったこと

- 1 二振りとも、1984(昭和59)年11月27日の日付シートが封入され、同時期に撮影されたとみられるモノクロ写真には樹脂封入遺物に見える破損は認められないことから、樹脂封入されたのは、取り上げ後の時間の経過で、立鼓柄刀柄部の破片崩壊が進んでからの措置だったと推測される。
- 2 金属遺物を合成樹脂に封入し保全する手法は、1976(昭和51)年に東京文化財研究所が松本市桜ヶ丘古墳の金銅製天冠の保存修復で行った事例がある。(東京文化財研究所『保存科学』15号 1976年)
- 3 事前の判断材料がない中で最も危惧されたのは、封入樹脂の性状と刀の遺存強度だった。角部^{すみ}試取りで樹脂の固化が確認できた。
- 4 立鼓柄刀の柄部破片群は、X線透過観察で相互連絡していないことがわかっていたので、樹脂片の除去を最優先に解体を進めた。破片群の原位置のとなる柄部の芯は、個々の破片との接合面を削り落とさないようサビを除去した。
- 5 立鼓柄刀の鱗片状のサビは所々でドーム型の脹れとなって刀表面の形状を損ねているため、ドームをエアブラシで切開して内部に詰まっている土砂や樹脂片を取り除いた。
- 6 脱塩処理では二振りとも塩化物の溶出があり、ことに立鼓柄刀で顕著だった。にもかかわらず、サビ(腐食)が抑えられていたのは、樹脂封入処置が、外部からの水分や酸素の遮断によって抑えられていたという効果が推測できる。
- 7 立鼓柄刀の破片接合の工程で、柄部本体への柄頭の接合形態に確固とした根拠が得られなかったが、1のモノクロ写真で柄部の寸法や柄頭の位置関係が確認でき、接合が可能となった。
- 8 蕨手刀の刃先の二枚割れについては、棟側が割れない程度に樹脂を切り出したV字形断面の隙間に、大気中の空気・水分の影響を抑制するためにエポキシ樹脂を補填した。

おわりに

二振りの古代刀の封入樹脂の除去から保存処理まで一連の保存修復を行ったことで、不明確だった形状が目視できるようになり、活用の幅も広がります。考古資料の保存修復は、遺^{のこ}っている最善の形状を次の世代に引き継ぐことを目的に行われます。割れたりサビだらけでも破片として遺^{のこ}されていれば、保存修復で当初の形状に戻せることをより多くの場面で実施していきたいと考えています。

(白沢勝彦)



立鼓柄刀の処理前(上段)、処理後(下段)



蕨手刀の処理前(上段)、処理後(下段)



■2017(平成29)年 7月～9月の行事予定

7月

休館日
3・10
18・24
31

夏季企画展

長野県誕生!

7/8日(土)～8/28(月)
■講演会
7/15(土) 13時30分～15時
「地方制度にみる明治維新」
講師 松沢裕作氏
(慶應義塾大学准教授)

講座・イベント

古文書講座

初級
第2回 A 7/2(日)・B 7/20(木)
中級
第2回 A 7/1(土)・B 7/20(木)
上級
第3回 7/29(土)

巡回展

長野県の遺跡発掘 2017

長野県伊那文化会館
7/29(土)～8/20(日)
■講演会

8/19(土) 13時30分～15時
●「信州黒耀石文化」
(大竹憲昭)
●「再考シナノ古墳文化」
(西山克己)
◆伊那文こどもまつり
8/20(日)
10時～15時(予定)
●縄文人になろう(予定)
●展示解説デー
8/5(土)、8/12(土)
10時～、13時30分～

歴史館ふるさと講座

「自然と向き合い、
暮らしを築く」
第5回: 7/1(土)
13時30分～15時
●「ここまでわかった「戌の満水」
(1742(寛政2)年千曲川大洪水)」
(青木隆幸)

8月

休館日
7・21
29・30

歴史館で夏休み

8/5(土) 10時～15時

古文書講座

初級
第3回 A 8/6(日)・B 8/17(木)
中級
第3回 A 8/5(土)・B 8/17(木)
上級
第4回 8/26(土)

ティーンズ古文書講座

8/8(火)～8/11(金・祝)

長野県の遺跡発掘 2017

安曇野市豊科郷土博物館
8/26(土)～9/24(日)
■講演会

9/2(土) 13時30分～15時
●「象嵌装大刀を持ったシナノ
舎人たち」(西山克己)
9/16(土) 13時30分～15時
●「黒耀石のみちを考える」
(大竹憲昭)
●展示解説デー
8/26(土)、9/9(土)
10時～、13時30分～

やさしい信濃の歴史講座 in 上田

上田会場(信濃国分寺資料館)
8/26(土)

9月

休館日
4・11
19・25

秋季企画展

進化する縄文土器
9/16(土)～11/26(日)

考古学講座

第2回 9/30(土)
13時30分～15時
●「焼町VS勝坂～競い合い、
高め合う縄文中期の土器装飾～」
(寺内隆夫)

古文書講座

初級
第4回 A 9/3(日)・B 9/14(木)
中級
第4回 A 9/2(土)・B 9/14(木)
上級
第5回 9/30(土)

表紙の写真の解説

長野県管内信濃国全図 [1880(明治13)年当館蔵]
1876(明治9)年8月に内務省主導の大統廃合により、
筑摩県が長野県に併合され、その時筑摩県の飛騨地
域を岐阜県へ分割し、今日に近い長野県が誕生しまし
た。この時期の「長野県」のとらえ方が読み取れる地図
です。しかし「長野県」は単なる役所と考えられていた
ようで、依然として信濃国〇〇郡とされています。「長
野県〇〇郡〇〇町・村、誰々」と表現されるようにな
るのは、明治30年代以降のことです。

行事アルバム

長野県の遺跡発掘2017 巡回展・講演会



4月22日(土)当館講堂にて、巡回展「長野県の
遺跡発掘2017」講演会を開催しました。

大竹幸恵氏(長和町教育委員会)から「最古の信
州ブランド黒耀石を世界に発信」と題してご講演
いただきました。会場からは、「黒耀石について、
よく理解できた。長和町へぜひ出かけてみたい」
などの意見が数多く聞かれました。

歴史館でこどもの日



縄文人になって遊ぼうのひとこま

5月5日、天気にも恵まれ、375名の皆様に参
加いただきました。「石のアクセサリづくり」や
「プラ板マスコットづくり」「縄文人になって遊ぼ
う」などのブースを楽しむ子どもたち・ご家族の
姿がありました。

長野県立歴史館たより 夏号 vol.91
2017(平成29)年 6月8日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ http://www.npmh.net/

印刷 富士印刷株式会社